

新編

久坂葉子作品集

富士正晴編



久坂葉子作品集

富士正晴編

構想社





新編久坂葉子作品集

一九八〇年八月二五日第二刷発行

定価一三〇〇円

著者 久坂葉子

編者 富士正晴

発行者 坂本一亀

発行所 株式会社構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ六

〒101 電話(〇三)五九七六
振替口座 (東京) 一七五九七

印刷所 新陽印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替えいたします)

新編 久坂葉子作品集・目次

〈小説〉

うらという女 8

計画は空し 14

四年のあいだのこと 21

猫 43

愛撫 54

宿雨の泣き 67

ゆき子の話 76

月の夜 88

黒い扮装 93

一夜 110

ふたつの花 127

一年草 157

孕む 169

女 172

女 175

〈詩〉

鳥と私 186

紅白の折り鶴 189

白い花 190

心の根底 200

たんぽゝ 201

はかなき青春 202

花に 203

なみだ 204

地下鉄サブウェイ 206

都会 207

都会の憂愁 208

感傷のうた 209

どこもかも十二月

幻想の世界 213

〈エッセイ〉

馬鹿者 216

南窗記 219

ある日の話 224

私 231

私はこんな女でござる 240

隠居趣味 244

やりたいこと 246

されこうべ 248

されこうべの恋 250

著者略歴 254

あとがき（富士正晴） 255

装画・本文カットⅡ著者（昭和21年4月9日画）

新編 久坂葉子作品集

小説



うらという女

うらは御寺の娘だった。北陸の海に面している小さな村に、たった一つのお寺。うらは、うすぐらいその伽藍の中で産声をあげた。三里の道の子坊主の自転車にのせられて隣村の産婆がやって来た時、うらはもう既に生まれていた。革の支那カバンを提げて来た産婆は、それからいろいろと御湯の加減を見たのだった。うらは真赤で小さかった。そして無暗に目が光っていた。

うらは母親のおきんの手伝いをしい／＼大きくなった。仏様の御供物の支度、黒光りした広い廊下の雑巾がけ、石の敷きつめた玄関の水打ちなどがうらの役目だった。二人いる小僧さんにまじって身の丈より高い箒を持ったり、重いバケツを運んだりした。うらは斯うして元気に育った。五つになってもやっぱり真赤で小さく目が光っていた。

うらはやがて小学校へ行き出した。それは、桃や桜の満開の頃で、菜の花もにぎやかな色どり

を見せていた。学校の先生は異様に恐かったけど、うらはいつも黙っていた。臆病そうに上眼を時々使っては、線の入った帳面一ぱいに絵をかいたりした。先生の顔が真っ四角だったから、うらはどんな御人形を書いても四角い顔に書いていた。

うらは朝五時に起きて御飯ごしらえの手伝いをした。そうして父親と一しょに、一家そろって御経をあげた。その頃下に小さい男の子が生まれていたので、うらの一家は年よった御婆々さんと御父さん、御母さん、うら、そして小さいやゝさんだった。

うらは朝御飯を頂いてから島の仕事もやった。そうしてから小学校へ行くのだった。

うらにとって学校は面白いところだった。友達はなかったけれど、珍しい西洋花がたくさんあるので嬉しかった。葉っぱの大きいぶあついチューリップや、白い玉がたくさんぶらさがっている鈴蘭や、うらは花が大好きだった。

その頃、うらの家に町の中学へ通っている人がよく出入りした。父さんの兄弟子の子供だった。うらは兄さんと呼んでいた。兄さんは親切で大人しかった。そしてうらによく、絵本や千代紙をもつて来てくれた。兄さんは電柱のように背がひょろ高く、大きな歯が飛び出して口がみにくかった。黒玉の数珠が、いつも細い腕にまきついていていた。うらは兄さんの膝に乗りかゝってよくその珠を数えた。

うらは、そのうち町の女学校へ入学することになった。黒い長いヒダの入ったスカートと、裾

についている白い線がとても得意だった。うらは赤いカバンをさげて村から行く女の子と四つの峠を越して学校へ行った。町には、小さな活動写真小屋と寄席があった。でも大い一月に**ヒトンキ**一べんで四五日かゝるだけだった。その時は必ずあんさんに連れて行ってもらった。あんさんはその頃、隣村の御寺で修行していた。だからあんまり遊べなかったが、その時だけは、こっそり出て来て、うらと一しょに飴棒を齧りながら観た。学校は小学校の時よりもっとたのしかった。うらが何よりもたのしみなのは、西洋のかわいゝ歌を覚えることだった。若い女の先生がピアノを弾きながら歌って下さるのを、どんなにうれしくきいたことか、山へ登ったりする時、うらは一番先に習った歌をうたい出した。たりした。

まもなくうらは女学校を卒業することになった。あんまりいゝ成績じゃなかったけれど、水色のリボンのかゝった御免状を頂いた時は本当にうれしかった。卒業した日のことだった。うらはお母さんよりこんな事をきかされた。それはうらが生まれる前に、若し生まれた子が女なれば兄弟子の息子に嫁にやると約束していた、という事だった。それは云う迄もなく兄さんの事だった。うらは本当にびっくりした。そして何かしら恥づかしかった。兄さんに対して本当の兄さんのように甘えたりしていたからだった。うらは広い広い麦畠の中を、嫌だ嫌だとかけ逃げた。嫁に行くなんぞ恐しくて堪らなかつた。うらはあの時ほど早くかけた事はなかつた。唯、いや／＼とかぶりをふりつゝ逃げまわった。うらは、父さんや母さんに恐い顔をされてもいやだった。そし

て、うらは突然、村を出てしまった。

うらが行きついた所は、京都の叔母さんの所だった。うらはそこで毎日／＼遊びまわった。叔母さんが三味線の御師匠はんをしていたので、いろんな男の人達と附合った。そして、あんさんをやたらに忘れたかった。兄さんは、今迄、きらいじゃなかったけれど妙に、あの麦畠以来嫌悪するようになってしまった。

芝居小屋につとめている新さんや、三味線弟子の御てつ坊の兄さんや、そんな人がうらの遊び相手だった。派手なところへ出入りしたりして、田舎娘のうらは急に艶しい妖女になってしまった。うらが緋の襦袢をちら／＼すさばきの折にのぞかせるのが、新さん達の大気に入りだった。そして皆がうらを好きになった。うらはその頃、昔の山猿のような面影はちっともなくて、美しいひとになっていた。うらは別に誰も好きになれなかったが、とうの昔にあんさんのことは忘れていた。

こんな年が三年もつづいて、うらはだん／＼元の古巣が恋しくなりだした。心も身も、へとへとに遊び疲れ、衿をぬいた所など妙に、首すじが青白かった。うらが或る日、新さんとおそくまで酒場に遊んで帰ったら、突然、兄さんが来ていた。あんさんは立派な住職（おとこ）さんになっていた。ペロン／＼した安っぽい背広を着ていたが、頭はきれいに剃っており、手にはやはり黒い数珠を巻いていた。兄さんはうらに何度も結婚してくれと云った。兄さんはうらが好きなんだと云った。

そして、うらの静脈のうきでている細い手をそと握ったりした。でも、うらは嫌だ嫌だと云った。

兄さんは静かにうなずくと、「じゃいつまでも兄さんになつてろう、苦しいことがあったらいつでもおいで」と云って帰って行った。

その時、うらは急に悲しくなつて玄関先で泣いてしまった。うらは、京都の人はもうあきあきしていた。だから余程兄さんを追っかけてと思つたけどそれは出来なかった。昔のほずかしいことが、うすら残っていたから。

うらは、新さんも御てつ坊の兄さんも捨てゝ急に大阪へ来た。そして仕方なしに働いていた。それは小さい漁業組合の秘書さんだった。その組合の人達は、一年の大半海でくらしていた。だからがらあぎの事務所にはとんど、組合長さんと二人で、書類の整理や文書の送り返しなどをやっていた。組合長さんは、一目見たら恐かつたけど、根はやさしくって正直な人だった。うらは組合長さんが大好きだった。だが組合長さんはうらなんぞ、問題にしなかつた。うらはいつもさびしかった。

そして二年たつて、そこをやめてしまった。一人で小さな鞆を持ち駅へ来た時、急に田舎がこいしくなつた。そして、あんさんと結婚しようと思ひたつた。うらは神戸で土産物を買つたりして汽車に乗つた。五年ぶりの故郷だった。父さんも母さんも年寄つてしまわれたが、昔とちつと

も変っていなかった。優しく迎えてくれた。けど、けど、あんさんは、他人の嫁さんをもらっていた。そして子供まであった。うらは、そのことをきいてびっくりした。五年前に驚いて麦畠を走ったように、今度も大声で泣きながら走った。恥ずかしさも、恐しさもなかった。唯悲しさで一ぱいだった。

昔のように、よく走れなかった。うらは丘の松の木の下でへと／＼になって寝ころがった。御白粉のはげた頬をおさえながらなおも激しく泣いた。とんびがゆっくり／＼輪をかいてないいた。

ピーヒョロ／＼　ピーヒョロ／＼

うらはその声をきゝながら悔いても悔いきれぬものと一抹のさみしさばかりが胸の中で、一ぱいになっていた。

（川崎澄子「名」）

計画は空し

真木新子は、満十七歳の誕生日に、父親の真木圭介から、はじめて人生についての意見らしいものをきくにおよんだ。白髪に面高、鋭い眼と、力のはいった唇は、嚴父の風格を十分にそなえている。そして五人家族の大黒柱の資格満点の真木圭介である。彼は、優秀な成績で公立の大学を出、大規模な鉄会社の重役をしていた。酒は飲まぬ。色事に関しては、話をきくだけで嫌悪感をおぼえるという彼のことだから、自然、家庭の教育には熱心な親父ぶりであった。長男、次男、三男、そして新子と妹の幼少時代からの躰は、悉く父親自身が指導し、色白無口の彼の妻は、置物のような存在でしかなかった。息子達は、敗戦後の混乱時代にかかわらず、一人としてぐれるものなく、学問にはげみ品行方正であった。長男は、経済科出身、次男は医者、三男は法律と、それ／＼の部門に専心した。真木圭介はすこぶる満足であった。